○目安き肖物にし給へるを　思ふ事無き御仲と云ひてあやかり物とせしに。
○漏りて聞き付けらる　夕霧が歌を忍びて吟じ給ひしが北の方に漏れ聞えしなり。
○何時とかは云々　宮の御言に夢の世を少しも思ひ覺す折あらばとありし其約束の御一言を何時と定めて待ちも見るべきぞ。
○上より落つる　古歌に「如何にして如何によからん小野山の上より落つる音無しの瀧」
○持て參れる　小野よりの御返事を。
○かやうのすき心思ひ入らるゝは　斯樣に思ひ入りて戀する事は。
○現心ならぬ　本心にてはなき意。
○六條院にも　源氏も。

目安き肖物にし給へるを、あり〳〵て末に、恥ぢがましき事やあらん、など、いと甚う歎い給へり。夜も明け方近く、互に打解け給ふ事無くて、背き〳〵に歎き明して、朝霧の時間も待たず、例の文をぞ急ぎ書き給ふ。いと心づき無しと思せど、ありしやうにも奪ひ給はずいと細やかに書きて、打置きて嘯き給ふ。忍び給へど漏りて聞き付けらる。

（夕）「何時とかは、驚かすべき、明けぬ夜の、夢覺めてとか、言ひし一言。」

上より落つるとや書い給へらん。押し隱みて「名殘も如何でよからん。」など口ずさび給へり。人召して給ひつ。御返事をだに見付けてしがな。猶如何なる事ぞと、氣色見まほしうおぼす。日闌けてぞ持て參れる。紫のこまやかなる紙すくよかにて、小少將ぞ例の聞えたる。唯同じ樣に、甲斐なき由を書きて、いとほしさに、かのありつる御文に手習ひすさみ給へるを、竊みたるとて、中に引き破りて入れたり。目には見給ひてけりと思すばかりの嬉しさぞ、いと人わろかりける。そこはかと無く書き給へるを、見續け給へれば、

（宮）「朝夕に、泣く音を立つる、小野山は、絶えぬ涙や、音無しの瀧。」

とや取り做すべからん。故事など物思はしげに書き亂り給へる、御手など見所あり。人の上などにて、かやうのすき心思ひ入らるゝは、もどかしう現心ならぬ事に見聞きしかど、身の上にては、實にいと堪へ難かるべき事なりけり。怪しや、何ど斯うしも思ふらん、と思ひ反し給へど、得しも協はず。

六條院にも聞し召して、いとおとなしう萬を思ひ靜め、人の譏り所無く、目安くて過し給ふを、面立たしう、我が古少しあざればみ、あだなる名を取り給ひし面起しに嬉しう思し

○大臣　致仕の大臣。
○何方にも　北の方の爲にも落葉の爲にもなり。
○無言太子　太子休皈經に「無言太子婆羅奈國王之太子。其名休皈。容端正。生而十三年無言云々」
○法師ばらの悲しき事にする　無言の行のことなり。
○御息所の忌はてぬらんな　源氏の夕霧の心を引き見んといひ出でたるなり。
○三十年よりあなた　御息所の入内せし昔のことを思ひていへるなり。
○誠にをしげなき人だに云云　出家の難きをいふ。

にたるを、いとほしう何方にも心苦しき事のあるべき事。差し離れたる仲らひにてだにあらで、大臣なども如何に思ひ給はん。さばかりの事辿らぬにはあらじ、宿世と云ふもの、遁れわびぬる事なり。ともかくも口入るべき事ならず、と思す。女の爲のみこそ、何方にもいとほしけれど、愛無く聞し召し歎く。紫の上にも、來し方行く先の事思し出でつゝ、斯う樣のためしを聞くに付けても、亡からん後うしろめたう思ひ聞ゆる樣をの給へば、御顏うち赤めて、心憂く然まで後らかし給ふべきにやと思したり。女ばかり身を持て做す樣も、所せう、哀なるべき者は無し。物の哀をもをかしきことをも、見知らぬ樣に引き入り、沈みなどすれば、何に付けてか世に經る映えぐ〳〵しさも、常無き世の徒然をも慰むべきぞは。大方物の心を知らず、言ふ甲斐なき者に習ひたらんも、生ふし立てけん親も、いと口惜しかるべき物にはあらずや。心にのみ籠めて、無言太子とか、法師ばらの悲しき事にする、昔の譬のやうに、惡しき事善き事を思ひ知りながら、埋もれなんも言ふ甲斐なし。我心ながらも、よき程には如何で保つべきぞと思し運らすにも、今は唯女一の宮の御爲なり。

大將の君參り給へる序ありて、思ひ給へらん氣色もゆかしければ、（源）「御息所の忌果てぬらんな。昨日今日と思ふ程に、三十年よりあなたの事になる世にこそめれ。哀にあぢきなしや。夕の露のかゝる程の貪よ。如何で此髮剃りて、萬背き捨てんと思ふを、さも長閑やかなるやうにても過すかな。いとわろき事なりや。」との給ふ。（夕）「誠に惜しげ無き人だに、おのがじゝは離れ難く思ふ世にこそ侍るめれ。」など聞えて、（夕）「御息所の四十九日の

○院　朱雀院。
○彼の御子　落葉宮。
○入道の宮　女三宮。
○らうたうし給ひけれ　朱雀院が。
○御心はいかゞ云々　夕霧の落葉の事を知らぬ顔にいふなり。
○いとつれなし　心強く隱し給ふなり。
○御法事に云々　御息所の御法事に夕霧萬事取持ちてせさせ給ふなり。
○大殿　致仕の大臣。
○女方　落葉宮。
○これかれ　柏木の兄弟など。
○時の人の云々　時得たる人の佛事にも劣らずとなり。
○かくて住みはてなん　出家してこのまゝ小野に住まんと願ふなり。

わざなど、大和守某の朝臣、一人扱ひ侍る、いと哀なる事なりや。はかゞしきよすがなき人は、生ける世の限にて、かゝる世の果こそ悲しう侍りけれ。」と、聞え給ふ。(源)「院よりもとぶらはせ給ふらん。彼の御子如何に思ひ歎き給ふらん。早う聞きしよりは、此近き年頃、事に觸れて聞き見るに、此更衣こそ口惜しからず目安き人の中なりけれ。大方の世に付けて惜しきわざなりや。さてもありぬべき人の、斯う亡せ行くを、院もいみじう驚き思したりけり。かの御子こそは、此處に物し給ふ入道の宮より、差次には可愛うし給ひけれ。人ざまも善くおはすべし。」との給ふ。(夕)「御心は如何が物し給ふらん。御息所は異も無かりし人のけはひ心ばせになん。親しう打ち解け給はざりしかど、はかなき事の序に、自ら人の用意は顯なる物になん侍る。」と聞え給ひて、宮の御事も掛けず、いとつれなし。斯ばかりのすくよけ心に、思ひ初めてん事、諫めんに協はじ。用ゐざらん物から、我賢しらに言出でんも、あいなしと思して止みぬ。かくて御法事に、萬取り持ちてせさせ給ふ事の聞え、自ら隱れ無ければ、大殿などにも聞き給ひて、然やはあるべきなど、女方の心淺きやうに、思し做すぞわりなきや。かの日は昔の御心あれば、君達もまかゞでとぶらひ給ふ。誦經など、殿よりもいかめしうせさせ給ふ。これかれも樣々劣らずし給へれば、時の人のかやうのわざに劣らずなんありける。

宮は斯くて住み果てなんと思し立つ事ありけれど、院に人の漏し奏しければ、(朱雀)「いとあるまじき事なり。實に數多とざまかうざまに、身をもてなし給ふべき事にもあらねど、後見なき人なん、なか〳〵然る樣にて、あるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世後

○此許に　我。
○末無きやうに　初有りて終無き樣なりと。
○樣の者と　同じ樣なる者とならんと。
○この浮きたる御名　宮の夕霧との浮名。
○恥かしとおぼさん　落葉宮が。
○御息所の心知なりけり云々　御息所の心を知りてうべなひたりと人に言はんとなり。
○更返りて　今更に事を始めて。
○かの家にぞ　大和守が家にてなり。

の世、中空にもどかしき咎負ふ事なる。此許に斯く世を捨てたるに、三宮の同じ如身をやつし給へる、末無きやうに人の思ひ言ふも、捨てたる身に思ひ惱むべきにはあらねど、必ず然しも樣の者と爭ひ給はんもうたてあるべし。世の憂きに付けて厭ふはなか〳〵人わろきわざなり。心と思ひ取る方ありて、今少し思ひ鎭め、心澄ましてこそ、ともかうも。」と度々聞え給ひけり。この浮きたる御名をぞ聞し召したるべき。さやうの事の思はずなるに付けて、倦じ給へると云はれ給はん事を、おぼすなりけり。さりとて又顯はれて物し給はんも淡々しう、心づき無き事とおぼしながら、恥かしとおぼさんもいとほしきを、何かは我さへ聞き扱はんと思してなん、此筋は掛けても聞え給はざりける。

大將も、とかく言ひ做しつるも、今は愛無し。かの御心に許し給はん事は、難げなゝめり。御息所の心知なりけりと人には知らせん。如何がはせん。亡き人に少し淺き咎は負はせて、何時あり初めし事ぞともなく紛はしてん。更返りて懸想だち、涙を盡しかゝづらはんも、いと初々しかるべし、と思ひ給ひて、一條に渡り給ふべき日、その日ばかりと定めて、大和守召して、あるべき作法の給ひ、宮の內拂ひしつらひ、さこそ云へども、女どちは草繁う住み做し給へりしを、磨きたるやうにしつらひ做して、御心づかひなど、あるべき作法めでたう、壁代、御屏風、几帳、御座などまで思し寄りつゝ、大和守にの給ひて、かの家にぞ急ぎ仕うまつらせ給ふ。

その日は我おはし居て、御車御前など奉れ給ふ。宮は更に渡らじとおぼしの給ふを、人々いみじう聞え、大和守も「更に承はらじ。心細く悲しき御有樣を見奉り歎き、此程の宮仕

○いと怠々しう　今後の御後見も無ければなり。
○かく萬に思し嘗む　夕霧が。
○一所やは云々　落葉一人ばかり世の批評はうけ給ふまじとなり。
○君達の聞え知らせ奉り給はぬなり　人々の諫め申さるべき事なるにとなり。
○左近少將　共に落葉宮の侍女なり。
○集りて聞えこしらふる　女房等の集りて渡り給へと言ひこしらふるなり。
○時違ひぬ　出立の時刻も過ぎぬ。
○御鋏などやうの物は皆とり隠して　御出家あらせじとの用心なり。
○おずまし　強情なり。

は、堪ふるに隨ひて仕うまつりぬ。今は國の事も侍り、罷り下りぬべし。宮の内の事も見給へ讓るべき人も侍らず。いと怠々しう、如何にと見給ふるを、かく萬に思し營むを、實に此方に取りて思ひ給ふるには、必ずしもおはしますまじき御有樣なれど、さこそは古も御心に協はぬ例多く侍れ。一所やは世のもどきをも負はせ給ふべき。いと幼くおはしますなり。猛うおぼすとも、女の御心一つに、我御身を取り認め、顧み給ふべきやうかあらん。猶人の崇めかしづき給へらんに助けられてこそ、深き御心の賢き御掟も、それに懸るべき物なれ。君達の聞え知らせ奉り給はぬなり。且は然るまじき事をも、御心どもに仕う奉り初め給ひて。」と言ひ續けて、左近、少將を責む。集りて聞えこしらふるに、いとわりなく、鮮なる御衣ども、人々の奉り更へさするも我にもあらず。猶いとひたぶるに削ぎ捨てまほしう思さるゝ御髪を搔き出で見給へば、六尺ばかりにて、少し細りたれど、人は片端にも見奉らず。自の御心には、いみじの衰や。人に見ゆべき有樣にもあらず。樣々に心憂き身を、と思し續けて、復臥し給ひぬ。(人々)「時違ひぬ。夜も更けぬべし。」と皆騒ぐ。時雨いと心あわたゞしう吹き紛ひ、萬に物悲しければ、

(宮)「上りにし、峯の煙に、立ちまじり、思はぬ方に、靡かずもがな。」

心一つには強くおぼせど、其頃は御鋏などやうの物は、皆取り隠して、人々の護り聞えければ、斯く持て騒がざらんにだに、何の惜しげある身にてか、嗚呼がましう若々しき樣には引き忍ばん。人聞もうたて悍ましかゝべき事を、と思せば、その本意の如もし給はず。人々は皆急ぎ立ちて、各、櫛、手箱、唐櫃、萬の物を、はか〴〵しからぬ袋やうのなれど、皆

○こち　小野へ。
○御髪かきなで　故御息所がなり。
○目もきりて　涙にて暗くなるなり。
○玉の箱　經箱。
○黒きもまだ云々　喪中に用ゐるべき黒漆の調度も未だ調ひ敢へずとなり。
○誦經にせさせ給ひしを　誦經の布施にとて調へ給ひしを。
○おはしまし着きたれば　一條の宮になり。
○なよらかにをかしばめる事　好色だつ事。
○ゆくりかなる　意外なる。
○御設など樣變りて　服中なれば婚儀の御設など常と樣かはりて。
○渡り給ひて　夕霧が宮の方へなり。

先だてゝ運びたれば、獨留り給ふべうもあらで、泣く〴〵御車に乘り給ふものから、傍のみ護られ給ひて、こち渡り給ひし時、御心地の苦しきにも、御髪搔き撫で繕ひ、下し奉り給ひしをおぼし出づるに、目も霧りていみじ。御佩刀に添へて、經箱を添へたるが、御傍も離れねば、

「戀しさの、慰め難き、形見にて、涙に曇る、玉の箱かな。」

黒きもまだ仕敢へさせ給はず、かの手馴らし給へりし螺鈿の箱なりけり。誦經にせさせ給ひしを、形見に留め給へるなりけり。浦島の子が心地なん。

おはしまし着きたれば、殿の内悲しげも無く、人げ多くて、あらぬ樣なり。御車寄せて下り給ふを、更に古里と思ほえず。疎ましううたて思さるれば、頓にも下り給はず。いと怪しう若々しき御樣かなと、人々も見奉り煩ふ。殿は東の對の南面を、我御方に假にしつらひて、住み着き顔におはす。三條殿には、人々、俄にあさましうなり給ひぬるかな、いつの程にありし事ぞと驚きけり。なよらかにをかしばめる事を好ましからずおぼす人は、斯くゆくりかなる事ぞ打ちまじり給うける。されど年經にける事を、音無く氣色も漏らさで過し給ひけるなり、とのみ思ひ做して、かく女の御心緩び給はぬと思ひ寄る人も無し。とてもかくても、宮の御爲こそいとほしけれ。

御設など樣變りて、物の初ゆゝしけなれど、物參らせなど、皆靜まりぬるに、渡り給ひて、少將の君をいみじう責め給ふ。(少將)「御志誠に長うおぼされば、今日明日を過して聞えさせ給へ。なか〳〵立ち歸りて物思し沈みて、亡き人のやうにてなん臥させ給ひぬる。こしら

○又いたづら人に　又空しき人にとなり。御息所の事あれば又と云ふなり。
○未だ知らぬ世かな　斯かる事は世に類あらじとなり。
○未だ知らぬは　未だ知らぬ世かなと宣ふは。
○世附かぬ御心構　世に從はぬ御性癖。

へ聞ゆるをも、つらしとのみ思されたれば、何事も身の爲こそ侍れ。いと煩はしう聞えさせにくゝなん。」と聞ゆ。(タ)「いと怪しう、推し量り聞えさせしには違ひて、いはけなく心得難き御心にこそありけれ。」とて、思ひ寄れる樣、人の御爲も、我爲も、世のもどき有るまじうの給ひ續くれば、(少將)「いでや只今は、又徒人に見なし奉るべきにやと、あわたゞしき亂り心地に、萬思ひ給へ分れず。あが君とかく押し立ちて、ひたぶるなる御心な遣はせ給ひそ。」と手を擦る。(タ)「いと未だ知らぬ世かな。憎くめざまましと、人より殊に思し貶すらん身こそいみじけれ。如何で人にもことわらせん。」と、言はん方無しと思しての給へば、さすがにいとほしうもあり。(少將)「未だ知らぬは、實に世付かぬ御心構の故にこそは、と、道理は實に、何方にかは寄る人侍らんとすらん。」と、少し打笑ひぬ。斯く心強けれど、今は堰かれ給ふべきならねば、やがて此人を引き立てゝ、推量り入り給ふ。宮はいと心憂く、情無く淡つけき人の心なりけりと、妬くつらければ、若々しき樣には言ひ騷ぐとも思して、塗籠に御座一つ敷かせ給ひて、內より鎖して大殿籠りにけり。これも何時までにかは。かばかりに亂れ立ちにたる人の心どもは、いと悲しう口惜しうおぼす。男君は、めざましうつらしと思ひ聞え給へど、かばかりにては、何の持て離るゝ事かはと、のどかにおほして、萬に思ひ明し給ふ。山鳥の心地ぞし給ひける。辛うじて明方になりぬ。かくてのみことゝいへば、直面なるべければ、出で給ふとて、唯些の隙をだにと、いみじう聞え給へど、いとつれなし。

(タ)「恨み佗び、胸あき難き、冬の夜に、又差し增さる、關の岩門。」

○山鳥の心地　人麿の歌に「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨かもねん」
○かくてのみことゝいへば　意聞えず誤脫あるべし。
○關の岩門　宮の差し籠り給ふ塗籠を喩へて云ふ。

○東の上　花散里。
○亡からん後の後見云々　御息所の遺言なりと僞りいへるなり。
○院の渡らせ給へらんにも　源氏の此處へおはしたらん時。
○三條の姫君　雲井雁。
○らうたげにも云々　雲井雁たららうたげに姫君などゝ宣ふ事よ。
○御有樣　六條院の方々の御有樣。

聞えん方無き御心なりけりと、泣く〳〵出で給ふ。

六條院にぞおはして、やすらひ給ふ。東の上、「一條の宮渡し奉り給へる事と、かの大殿わたりなどに聞ゆる、如何なる御事にかは。」と、いと大どかにの給ふ。御簾に御几帳添へたれど、側より仄には猶見え奉り給ふ。(タ)「さやうにも猶人の言ひ做しつべき事に侍り。故御息所は、いと心强うあるまじき樣に、言ひ放ち給ひしかど、限の樣に、御心地の弱りけるに、又見讓るべき人の無きや悲しかりけん、亡からん後の後見にと樣なる事の侍しかば、もとよりの志も侍りし事にて、かく思ひ給へなりぬるを、樣々如何に人扱ひ侍らんかし。さしもあるまじき事をも、怪しう人こそ物言さが無き物にあれ。」と、打笑ひつゝ、(タ)「かの正身なん、猶世に經じと深う思ひ立ちて、尼になりなんと思ひ結ぼゝれ給ふめれば、何かは、此方彼方に聞きにくゝも侍るべきを、さやうに嫌疑離れても、又かの遺言は違へじと思ひ給へて、唯斯く言ひ扱ひ侍るなり。院の渡らせ給へらんにも、事の序侍らば、斯うやうにまねび聞えさせ給へ。あり〳〵て心づき無き心遣ふと、おぼしの給はんを、憚り侍りつれど、實にかやうの筋にてこそ、人の諫をも、自の心にも隨はぬやうに侍りけれ。」と、忍びやかに聞え給ふ。(花散)「人の僞にやと思ひ侍りつるを、誠に然る樣ある御氣色にこそは。皆世の常の事なれど、三條の姫君のおぼさん事こそいとほしけれ。のどやかにならひ給うて。」と聞え給へば、(タ)「「らうたけにもの給はせなす姫君かな。いと鬼々しう侍るさがな者をとて、何どてかそれをも疎にはもてなし侍らん。かしこけれど御有樣どもにても、推し量らせ給へ。なだらかならんのみこそ、人は終の事には侍るめれ。さがなく事がまし

569
357

○飽きたしや　人にあく心のつくなり。終には堪へざるに至るとなり。
○南の御殿　紫上。
○此御方　花散里。
○自の御癖　自身の好色の癖。
○人知らぬやうに　何ともの給はで。
○御心づかひ　夕霧の。
○後言　蔭言。
○賢き御教ならでも云々　源氏の御教訓なくても能く心を治めて侍るに。
○御前に參り給へれは　源氏の御前へ夕霧の參るなり。
○かの事　落葉宮の事。
○殿には渡り給へり　夕霧の三條第へ還るなり。
○いづことておはしつるぞ　何處と思ひて來給ひつるぞ。
○斯くだに云々　かくてありしとだに思ひ出で給ふな。
○近くこそ云々　見れば憎しと云ふを承けて云ふ。
○よそには云々　聞けば愛敬なしと云ふを承けて云ふ。
○契深かんなる云々　死に給ひぬと云ふを承けて云ふ。
○聊參りなどしておはす　雲井雁がなり。

くも、暫しは生むつかしう、煩はしきやうには憚らるゝ事あれど、それにしも隨ひ果つまじき事なれば、事の亂れ出で來ぬる後、我も人も憎げに飽きたしや。猶南の御殿の御心用こそ、樣々に有り難う、さては此御方の御心などこそは、めでたき物には見奉り果て侍りぬれ。」など譽め聞え給へば、笑ひ給ひて、(花散)「物の例に引き出で給ふ程に、身の人わろき覺こそ顯はれぬべう。さてをかしき事は、院の自の御癖をば、人知らぬやうに、聊あだ〳〵しき御心づかひをば、大事とおぼいて、誡め申し給ふ。後言にも聞え給ふめるこそ、賢しだつ人の、己が上知らぬやうに覺え侍れ。」との給へば、(夕)「さなん常に此道をしも、誡め仰せらるゝ。さるは賢き御教ならでも、いと能く治めて侍る心を。」とて、實にをかしと思ひ給へり。

御前に參り給へれば、かの事は聞し召したれど、何かは聞き顏にもとおぼいて、唯打ちまもり給へるに、いと賞でたく淸らに、此頃こそねびまさり給へる御盛なゝめれ。さる樣のすき事をし給ふとも、人のもどくべき樣もし給はず。鬼神も罪許しつべく、鮮に物淸げに、若う盛に匂を散らし給へり。物思知らぬ若人の程にはたおはせず、偏なる所無う、ねび調ほり給へる。ことわりぞかし。女にて何どか愛でざらん。鏡を見ても何どか驕らざらん、と我御子ながらもおぼす。

日闌けて殿には渡り給へり。入り給ふより、若君たち次々美しげにて纏はれ遊び給ふ。女君は帳の內に臥し給へり。入り給へれど目も見合はせ給はず。つらきにこそはあんめれと見給ふも道理なれど、憚り顏にももてなし給はず。御衣を引き遣り給へれば、(雲井)「いづことておはしつるぞ。常に鬼との給へば、同じくはなり果てなんとて。」との給ふ。(夕)「御心こそ鬼より殊にもおはすれ。樣は憎げにも無ければ、得疎み果つまじ。」と、何心も無う言ひ做し給ふも、心惱ましうて、「めでたき樣になまめい給へらんあたりに、在り經べき身にもあらねば、何地も〳〵失せなんとす。猶斯くだにな思し出でそ。間無く年頃を經るだに悔しきものを。」とて、起き上り給へる樣は、いみじう愛敬づきて、匂やかに打赤め給へる顏、いとをかしげなり。(夕)「かく心幼げに腹立ちなし給へればにや、目剔れて、此鬼こそ今は恐ろしくもあらずなりにたれ。神々しき氣を添へばや。」と、戲に言ひ做し給へば、(雲井)「何事言ふぞとよ。おいらかに死に給ひね。麿も死なん。見れば憎し。聞けば愛敬なし。見捨てゝ死なんは後めたし。」との給ふに、いとをかしき樣の み增されば、こまやかに笑ひて、(夕)「近くこそ見給はざらめ。よそには何どか聞き給はざらん。さても契深かゝなる世を知らせんの御心なゝなり。俄に打續くべかゝなる冥途のいそぎは、さこそは契り聞えしか。」と、いとつれなく聞えて、何くれとこしらへ聞え慰め給へば、いと若やかに心美しう、らうたき心はたおはする人なれば、等閑言と見給ひながら、自ら和みつゝ物し給ふを、いと哀とおぼすものから、心は空にて、かれもいと我心を立てゝ、强う物々しき人のけはひには見え給はねど、若し猶本意ならぬ事にて、尼になども思ひなり給ひなば、をこがましうもあゝべいかなと思ふに、暫しは跡絕置くまじう、あわたゞしき心地して、暮れ行くまゝに、今日も御返りだに無きよと思して、心に懸りて、いみじう眺をし給ふ。昨日今日露も參らざりける物聊參りなどしておはす。(夕)「昔より御爲

568
357

○恩し捨つまじき人々　出生の御子達。

○命こそ定め無き世なれ　命だにあらば我心變らじとなり。

○馴るゝ身を云々　馴れたる人のつらきを恨みんよりは尼になるべし。

○松島の云々　我身舊りぬればとて厭ひて尼になれりと云ふ名を立て給ふべきかは。

○かしこには猶さし籠り　落葉は猶ぬりごめにさし籠りておはするなり。

に志の疎ならざりし樣、大臣のつらくもてなし給ひしに、世の中の癡れがましき名を取りしかど、堪へ難きを念じて、こゝかしこ勸み氣色ばみしあたりを、數多聞き過しゝ有樣は、女だにさしもあらじとなん、人ももどきし。今思ふにも、如何でかはさありけんと、我心ながら、古だに重かりけりと思ひ知らるゝを、今は斯く憎み給ふとも、思し捨つまじき人々、いと所せきまで數添ふめれば、御心一つに持て離れ給ふべくもあらず。又よし見給へや。命こそ定め無き世なれ。」とて、うち泣き給ふこともあり。女も昔の事を思ひ出で給ふに、哀にも有り難かりし御仲の、さすがに契深かりけるかなと、思ひ出で給ふ。なよびたる御衣ども脱ぎ給うて、心異なるを取り重ねて、焚き染め給ひ、めでたう繕ひ假粧じて出で給ふを、火影に見出して、忍び難く涙の出で來れば、脱ぎ留め給へる單衣の袖を引き寄せて、

（憂井）「馴るゝ身を、恨みんよりは、松島の、蜑の衣に、裁ちや變へまし。猶現人にては、え過すまじかりけり。」と、獨言にの給ふを、立ちとまりて、（タ）「さも心憂き御心かな。

松島の、蜑の濡衣、馴れぬとて、脱ぎ更へつてふ、名を立ためやは。」

うち急ぎて、いと直々しや。

かしこには猶さし籠り給へるを、人々「かくてのみやは。若々しう怪しからぬ聞えも侍りぬべきを、例の御有樣にて、あるべき事をこそ聞え給はめ。」など、萬に聞えければ、さもある事とは思しながら、今より後よその聞えをも、御心の過ぎにし方をも、心づき無く、

○この御服の程　御息所の一周忌まで。

○又異ざまに　夕霧の心は普通の人と異やうにて實直なりとなり。

○斯かる亂　喪中なるをいふ。

○暫しは情ばまん　暫く此分にして御心破るまじ。

○人の御名　夕霧思を懸けしに又捨て奉りたりとの御聞え。

○此人　少將。

○入れ奉りてけり　夕霧をなり。

○男　夕霧。

怨めしかりける人のゆかりと思し知りて、その夜も對面し給はず。（タ）「戯れにくゝ珍らかなり。」と聞え盡し給ふ。人もいとほしと見奉る。（或人）「聊も人心地する折あらんに、忘れ給はずば、ともかうも聞えん。この御服の程は、一筋に思ひ亂るゝこと無くてだに、過さんとなん深くおぼしの給はするを、斯くいとあやにくに知らぬ人無くなりぬめるを、猶いみじうつらき物に聞え給ふ。」と聞ゆ。（タ）「思ふ心は又異樣に後安き物を、思はずなりける世かな。」と打ち歎きて、（タ）「例のやうにておはしまさば、物越などにても、思ふ事ばかり聞えて、御心破るべきにもあらず。數多の年月をも過しつべくなん。」など、盡きもせず聞え給へど、（宮）「猶斯かる亂に添へて、わりなき御心なんいみじうつらき。人の聞き思はんことも、萬になのめならざりける身の憂さをば然るものにて、殊更に心憂き御心構なり。」と又言ひ返し恨み給ひつゝ、遙にのみもてなし給へり。さりとて斯くのみやは。人の聞き漏さん事もことわりと、はしたなう、此處の人目も覺え給へば、（タ）「内々の御心づかひは、このの給ふ樣に協ひても、暫しは情ばまん。世づかぬ有樣のいとうたてあり。又斯かりて搔き絶え參らずば、人の御名如何がはいとほしかるべき。ひとへに物を思して、幼げなるこそいとほしけれ。」など、此人を責め給へば、實にとも思ひ見奉るも、今は心苦しう、辱う覺ゆる樣なれば、人通はし給ふ塗籠の北の口より入れ奉りてけり。いみじうあさましう辛しと、侍ふ人をも、實にかゝる世の人の心なれば、之よりまさる目をも見せつべかりけりと、賴もしき人も無くなり果て給ひぬる御身を、返す〴〵悲しうおぼす。男は萬に思し知るべきことわりを聞え知らせ、言の葉多う、哀にもをかしうも聞え盡し給へど、つ

○心づきなし　氣に入らぬなり。

○いみじう思ふ人も　一生不犯など思ふ人も。

○三條の君　雲井雁。

○泊りて　塗籠に泊るなり。

○をこがましき　夕霧の心に落葉を少しあきれしなり。

○故君　柏木。

らく心づき無しとのみおぼいたり。(タ)「いと斯う言はん方なきものに、おぼされける身の程は、類無う恥かしければ、あるまじき心のつき初めけんも、心地なく悔しう覺え侍れど、取り返す物ならぬ中に、何の猛き御名にかはあらん。言ふ甲斐なく思し弱れ。思ふに叶はぬ時、身を投ぐる例も侍るなるを、唯かゝる志を深き淵になずらへ給ひて、捨てつる身と思し做せ。」と聞え給ふ。單衣の御衣を引き包みて、猛き事とは音を泣き給ふ樣の、心深くいとほしければ、いとうたて、如何なればいと斯うおぼすらん。いみじう思ふ人も、かばかりになりぬれば、自ら弛ぶ氣色もあるを、岩木より殊に靡き難きは、契遠うて憎しなど思ふやうあゝなるを、然や思すらんと思ひ寄るに、餘りなれば心憂くて、三條の君の思ひ給ふらん事、古も何心も無う、相思ひかはしたりし世の事、年頃今はと裏無き樣に打弛み解け給へる樣を思ひ出づるも、我心もて、いと味氣無う思ひ續けらるれば、あながちにもこしらへ聞え給はず、歎き明し給ひつ。斯うのみ癡れがましうて、出で入らんも怪しければ、今日は泊りて、心のどかにおはす。斯くさへ一向なるを、あさましと宮はおぼいて、いよ〳〵疎き御氣色のまさるを、嗚呼がましき御心かなと、且は辛きものから哀なり。塗籠も殊に細かなる物多うもあらで、香の唐櫃、御厨子などばかり、あるは此方彼方に搔き寄せて、け近うしつらひてぞおはしける。内は暗き心地すれど、朝日さし出でたるけはひ漏り來たるに、埋もれたる御衣引き遣り、いとうたて亂れたる御髪、搔き遣りなどして、仄見奉り給ふ。いとあてに女しう、なまめいたるけはひし給へり。男の御樣は、麗しだち給へる時よりも、打ち解けて物し給ふは、恨も無う清けなり。故君の異なる事無か

○御容貌　落葉宮の。

○折さへいと心憂ければ　喪中たればなり。

○例の御座の方　常の御座の方。

○色異なる御しつらひ　喪中用ゐる鈍色の御しつらひ。

○香染　吉凶共に用ゐる色なり。

○沈の二階　沈の木にて作りたる二段作の置棚。

○搔練　薄紅梅。

○濃き衣　紫の衣。

○とかく紛らはして　喪中なれど吉服の樣に仕做して。

○女所　女のみ居て萬事取扱ふ所。

○此人　大和守。

○限なンめり　夕霧との契今限なんめり。

○大殿　父大臣の方。

○女御　弘徽殿の女御。

○急き渡り給はず　三條殿へなり。

○引切　性急。

りしだに、心の限思ひあがり、御容貌まほにおはせずと、事の折に思へりし氣色を思し出づれば、況て斯ういみじう衰へにたる有樣を、しばしにても見忍びなんやと思ふも、いみじう恥かし。とざまかうざまに思ひ運らしつゝ、我御心をこしらへ給ふ。唯傍痛う、此處も彼處も、人の聞き思はん事の罪去らん方無きに、折さへいと心憂ければ、慰め難きなりけり。御手水御粥など、例の御座の方に參れり。色異なる御しつらひも、忌々しきやうなれば、東面は屏風を建てゝ、母屋の際に香染の御几帳など、事々しきやうに見えぬ物、沈の二階などやうのを立てゝ、心ばへ有りてしつらひたり。大和守のしわざなりけり。人々も鮮ならぬ色の、山吹、搔練、濃き衣、青鈍などを着更へさせ、薄色のも、青朽葉などを、とかく紛らはして、御臺は參る。女所にてしどけなく、萬の事ならひたる宮の内に、有樣心留めて、僅なる下人をも言ひ調へ、此人一人のみ扱ひ行ふ。斯く覺えぬやんごとなき客人のおはすると聞きて、もと勸めざりける家司など、うちつけに參りて、政所などいふ方に侍ひて營みけり。

斯くせめて住み馴れ顔作り給ふ程、三條殿、限なゝめりと、然しもやはとこそ且は賴みつれ。實人の心變るは名殘無くなんと聞きしは、誠なりけりと、世を試み果つる心地して、如何樣にして、此無禮げさを見じと思しければ、大殿へ方違へんとて、渡り給ひにけるを、女御の御里におはす程などに、對面し給ひて、少し物思ひ晴け所におぼされて、例のやうにも急ぎ渡り給はず。大將殿も聞き給ひて、されば よ、いと急に物し給ふ本性なり。この大臣もはた、おとなし〳〵しう、のどめたる所さすがに無く、いと引切に華やい給へ

○見つけて　父君の歸れるを君達の見つけてなり。
○上　雲井雁。
○暮らして　日の暮るゝを待ちて。
○かゝる人　多くの御子達。
○寢殿の御交らひは　寢殿におはして女御と遊び居給ふはとの意。
○はかなき一節　落葉宮の事。
○怪しき人々　御子達をいふ。
○中空なる頃かな　北の方に疎まれ落葉は心強き故なり。
○かしこ　落葉の方。
○斯うやうなる事　斯かる戀路の事。

る人々にて、めざまし、見じ聞かじなど、僻々しき事どもし出で給ひつべきと、驚かれ給ひて、三條殿に渡り給へれば、君達も片方はとまり給へれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける。見付けて悅び睦れ、或は上を戀ひ奉りて、憂へ泣き給ふを、心苦しと思す。消息度々聞えて、迎に奉れ給へど、御返りだに無し。斯く頑しう輕々しの世やと、物しう覺え給へど、大臣の見聞き給はん所もあれば、暮らして自ら參り給へり。寢殿になんおはするとて、例の渡り給ふ方は、御達のみ侍ふ。若君達ぞ、乳母に添ひておはしける。(タ)「今更に若々しの御交らひや。かゝる人を此處彼處に落し置き給ひて、何ど寢殿の御交らひは。ふさはしからぬ御心の筋とは、年頃見知りたれど、さるべきにや。昔より心に離れ難う思ひ聞えて、今は斯くくだ〳〵しき人の、數々哀なるを、互に見捨つべきにやはと、賴み聞えける。はかなき一節に、斯うはもてなし給ふべくや。」と、いみじう淡め恨み申し給へば、(雲井)「何事も今はと見飽き給ひにける身なれば、今はた直るべきにもあらぬを、何かはとて。怪しき人々はおぼし捨てずば、嬉しうこそはあらめ。」と聞え給へり。(タ)「なだらかの御いらへや。言ひもて行けば、誰が名か惜しき。」とて、强ひて渡り給へともなくて、その夜は一人臥し給へり。怪しう中空なる頃かなと思ひつゝ、君達を前に臥せ給ひて、彼處に又如何に思し亂るらん樣、思ひやり聞え、安からぬ心盡しなれば、如何なる人斯うやうなる事、をかしう覺ゆらんなど、物戀りしぬべう覺え給ふ。明けぬれば、(タ)「人の見聞かんも若々しきを、限との給ひ果てば、然て試みん。彼處なる人々も、らうたけに戀ひ聞ゆめりしを、選り殘し給へる樣あらんとは見ながらも、思ひ捨て難きを、と

○すが〳〵しき御心　夕霧の物に頓着なきやうの心。
○知らぬ所　落葉の方。
○思ひ取る　よく物を聞き定めて其意を心得る。
○自ら人の氣色云々　行末には自ら夕霧の心は見えん。
○此宮　落葉宮。
○藏人の少將の君　柏木の弟。
○契あれや云々　契あればにや君を心に留め置きて、柏木の名殘に哀と思ひ雲井雁を中空にし給ふを怨めしと思ふ。
○猶え思し放たじ　緣深き宮なれば餘所には見給はじ。
○故上　御息所。
○心づき無しと　夕霧に靡きたるは心づき無しと。

もかくももてなし侍りなん。」と、おどし聞え給へば、淸々しき御心にて、この君達をさへや、知らぬ所に率て渡し給はんと危し。(タ)「姫君をいざ給へかし。見奉りに斯く參り來る事も、はしたなければ、當にも參り來じ。彼處にも人々のらうたきを、同じ所にてだに、見奉らん。」と聞え給ふ。まだいといはけなく、をかしげにておはす。いと哀と見奉り給ひて、(タ)「母君の御敎に協ひ給ひそ。いと心憂く、思ひ取る方なき心あるは、いと惡しき事なり。」と、言ひ知らせ奉り給ふ。

大臣かゝる事を聞き給ひて、人笑はれなる樣に思し歎く。(大臣)「しばしは然ても見給はで、自ら思ふ所物せらるらんものを、女の斯く引切なるも、却りては輕く覺ゆるわざなり。よし斯く言ひ初めつとならば、何かは癡れてふとしも歸り給ふ。自ら人の氣色心ばへは、見えなん。」との給へはせて、此宮に藏人の少將の君を、御使にて奉り給ふ。

(大臣消息)「契あれや、君を心に、留め置きて、あはれと思ひ、怨めしと聞く。猶え思し放たじ。」とある御文を、少將持ておはして、唯入りに入り給ふ。南面の簀子に圓座さし出でゝ、人々物聞えにくし。宮は況てわびしとおぼす。此君は、中にいと容貌よく、目安き樣にて、のどやかに見まはして、古を思ひ出でたる氣色なり。(少將)「參り馴れにたる心地して、初々しからぬに、さも御覽じ許さずもやあらん。」などばかりぞかすめ給ふ。御返しいと聞えにくゝて、(宮)「我は更に得書くまじ。」との給へば、(人々)「御志もうたて若々しきやうに、宣旨書はた聞えさすべきにやは。」と、集りて聞えさすれば、まづ打ち泣きて、故上おはせましかば、如何に心づき無しとおぼしながらも、罪を隱い給はましと思

568
357

○何故か云々　歎ならぬ身なれば憂しとも悲しとも人に思はるゝ道理無し。

○内外なども許されぬべき奥までも許さるべき。

○いとゞしく快からぬ御氣色　落葉宮の樣なり。

○大殿の君　雲井雁。

○典侍　惟光の女。

○我を世と共に云々　雲井雁が我を妬みて我を永く云々。

○斯く侮りにくき事　夕霧の落葉にかく心寄するこをいふ。

○歎ならば云々　我身歎ならば我身の上に濡すべき袖を雲井雁の爲に濡すよとなり。

○御中絶の程　雲井雁を大臣の方へ引き取りて夕霧と中絶えし時。

○事改めて後　雲井雁を北の方と定めし後。

ひ出で給ふに、涙の水莖に先だつ心地して、書き遺り給はず。

（官）「何故か、世に數ならぬ、身一つを、憂しとも思ひ、悲しとも聞く。」

とのみ思しける儘に書きもとぢめ給はぬやうにて、押包みて出し給ひつ。少將は人々と物語して、（少將）「時々侍ふに、かゝる御簾の前將つき無き心地し侍るを、今よりは便ある心地して、常に參るべし。内外なども許されぬべき年頃の驗顯はれ侍る心地なんし侍る。」など氣色ばみ置きて出で給ひぬ。

いとゞしく快からぬ御氣色、あくがれ惑ひ給ふ程、大殿の君は、日頃經る儘に、おほし歎くこと繁し。

典侍　斯かる事を聞くに、我を世と共に、許さぬ物にの給ふなるに、斯く侮りにくき事も出で來にけるをと思ひて、文などは時々奉れば、聞えたり。

（典侍）「數ならば、身に知られまし、世の憂さを、人の爲にも、濡らす袖かな。」

生異しとは見給へど、物の哀なる程の徒然に、彼もいとたゞには覺えじ、とおぼす片心ぞ付きにける。

（雲井）「人の世の、憂きを哀と、見しかども、身に代へんとは、思はざりしを。」

とのみあるを、おほしける儘と哀に見る。

この昔御中絶の程には、この尚侍こそ、人知れぬものに思ひ留め給へりしかど、事改めて後は、いと偶さかにつれなくなり增さり給ひつゝ、さすがに君達は數多になりけり。この御腹には、太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、大君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は三の君、六の君、次郎君、五郎君とぞおはしける。すべて十二人が中に、かたほなる無く、いとをかしけに、取々に生ひ出で給ひける。内侍腹の君達しもなん、貌をかしう、心ばせ才ありて、皆勝れたりける。三の君、二郎君は、東の御殿ぞ、取別きてかしづき奉り給ふ。院も見馴れ給ひて、いとらうたくし給ふ。この御仲らひの事、言ひやる方なくとぞ。

○東の御殿にぞ云々　花散里の御方にて養ふなり。

○院　源氏。

568
357

○いとおどろ〳〵しうはあらねど　事々しく大そうなる病にはあらぬなり。
○自の御心地には云々　紫上の自の身の上不足なることなしとなり。
○絆だにまじらぬ　子なきをいふ。
○本意ある樣になりて　出家の本意を遂げて。
○さるは我御心にも云々　源氏も出家の素志あるなり。
○こゝながら　後の世に對してこの世をいふ。

御法

此巻は源氏五十一歳の春より秋までの事なり。巻名は「絶えぬべき御法ながらぞたのまるゝ世々にと結ぶ中のちぎりを」といへる歌によれり。

紫の上いたう煩ひ給ひし御心地の後、いと篤しくなり給ひて、そこはかとなく惱み渡り給ふこと久しくなりぬ。いとおどろ〳〵しうはあらねど、年月重なれば、頼もしげ無く、いとゞあえかになり增さり給へるを、院のおもほし歎く事限無し。しばしにても後れ聞え給はん事をば、いみじかるべくおぼし、自の御心地には、この世に飽かぬこと無く、後めたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちに掛け留めまほしき御命とも思されぬを、年頃の御契懸離れ、思ひ歎かせ奉らん事のみぞ、人知れぬ御心の中にも、物哀におぼされける。後の世の爲にと、尊き事どもを多くせさせ給ひつゝ、如何で猶本意ある樣になりて、しばしもかゝづらはん命の程は、行を紛れ無くと、弛無く思しの給へど、更に許し聞え給はず。さるは我御心にも、しか思し初めたる筋なれば、かく懇に思ひ給へる序に催されて、同じ道にも入りなんとおぼせど、一度家を出で給ひなば、假にも此世を顧みんとはおぼしおきてず。後の世には、同じ蓮の座を分けんと契りかはし聞え給ひて、頼を懸け給ふ御中なれど、こゝながら勤め給はん程は、同じ山なりとも、峰を隔てゝ相見奉らぬ住處に、懸離れなん事をのみ思し設けたるに、かくいと頼もしげ無き樣に惱み篤い給へば、いと心苦しき御有樣を、今はと行き離れん際には捨て難く、なか〳〵山水の住處濁りぬべくおぼし

568
357

○淺へたる　淺き心の。
○此事　源氏の御許無き事。
○我御身にも罪輕かるまじきにやと　源氏の御許無くて本意の遂げられぬは我身の罪業重き故にやと。
○七僧　前に見えたり。
○女の御掟には云々　紫上の心の至深きをいふ。
○大將の君　夕霧。
○捧物　佛に捧ぐる物。
○こちたき　事々しき。
○石の上　「ふる」の枕詞、此處は古きの意に用ひたり。
○薪こる讃嘆の聲　行基の歌に「法華經を我が得しことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し」とあるを僧の唱ふるなり。
○三宮　匂宮にて六歳なり。
○薪盡きなん　命の終るをいふ。前に見えたり。
○薪こる　佛に仕ふる意。
○霞の間より　古今集に「山櫻霞の間より仄にも見てし人こそ戀しかりけれ」
○猶春に心留りぬべく　紫上平生春に心留め給へばなり。
○陵王　舞樂の名。
○脱ぎ掛けたる物　舞人の祿に衣を脱ぎ與ふるなり。
○手殘さず　舞の手を盡して。

滯る程に、唯うち淺へたる思の儘の道心起す人々には、こよなう後れ給ひぬべかゝめり。御許無くて、心一つにおぼし立たんも、樣惡しく本意無きやうなれば、此事によりてぞ、女君も怨めしく思ひ聞え給ひける。我御身をも、罪輕かるまじきやと、後めたくおぼされけり。

年頃私の御願にて書かせ奉り給ひける法華經千部、急ぎて供養し給ふ。我御殿とおぼす二條院にてぞし給ひける。七僧の法服など品々給はす。物の色縫目より始めて、淸らなる事限なし。大方何事も、いと嚴めしきわざどもをせられたり。事々しき樣にも聞え給はざりければ、委しき事どもゝ知らせ給はざりけるに、女の御掟には至深く、佛の道にさへ通ひ給ひける御心の程を、院はいと限なしと見奉り給ひて、大方の御しつらひ、何かの事ばかりをなん、營ませ給ひける。樂人舞人などの事は、大將の君取り別きて仕う奉り給ふ。內、春宮、后の宮達を始め奉りて、御方々こゝかしこに御誦經、捧物などばかりの事を、うちし給ふだに所せきに、まして其頃この御いそぎを仕う奉らぬ所無ければ、いとこちたき事どもあり。何時の程にいと斯く色々おぼし設けゝん。實に石の上の世々を經たる御願にやとぞ見えたる。花散里と聞えし御方、明石なども渡り給へり。南東の戸をあけておはします。寢殿の西の塗籠なりけり。北の廂に、方々の御局どもは、障子ばかりを隔てつゝしたり。

三月の十日なれば、花盛にて、空の景色などもうらゝかに物面白く、佛のおはすなる處の有樣遠からず思ひ遣られて、異なる深き心も無き人さへ、罪を失ひつべし。薪こる讃歎の聲も、許多つどひたる響、おどろ〳〵しきを、うち休みて靜まりたる程だに、哀におぼさるゝを、まして此頃となりて、何事に付けても、心細くのみおぼし知る。明石の御方に、三宮して聞えたまへる。

(紫)「惜しからぬ、此身ながらも、限とて、薪盡きなん、事の悲しさ。」

(明石)「薪こる、思は今日を、初にて、此世に願ふ、法ぞ遙けき。」

御返り、心細き筋は、後の聞えも心後れたるわざにや、そこはかと無くぞあゝめる。

夜もすがら、尊き事に、打ち合はせたる鼓の聲、絶えず面白し。ほの〴〵と明け行く朝ぼらけ、霞の間より見えたる花の色々、猶春に心留りぬべく匂ひ渡りて、百千鳥の囀るも、笛の音に劣らぬ心地して、物の哀も面白さも殘らぬ程に、陵王の舞ひて急になる程の、末つ方の樂、華やかに賑はゝしく聞ゆるに、皆人の脱ぎ掛けたる物の色々なども、物の折からにをかしうのみ見ゆ。親王達上達部の中にも、物の上手ども、手殘さず遊び給ふ。上下心地よけに、興ある氣色どもなるを見給ふにも、殘少しと身を思したる御心の中には、萬の事哀に覺え給ふ。

昨日例ならず起き居させ給へりし名殘にや、いと苦うて臥し給へる。年頃かゝる物の折每に、參りつどひ遊び給ふ人々の御容貌有樣の、おのがじゝの才ども、琴笛の音をも、今日や聞き給ふべきとぢめならんとのみおぼさるれば、さしも目留るまじき人の顏どもゝ、哀に見渡され給ふ。まして夏冬の時に付けたる遊戯にも、生挑ましき下の心は自ら立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはし給ふ方々は、誰も久しく留るべき世にはあらざゝな

○事果てゝ　八講果てゝ。
○絶えぬべき云々　今日の御法の朽ちぬ縁に花散里との中の契も世々に絶えじ。
○結び置く云々　花散里は年更けたれば大方の殘少きと云へるなり。
○うちはへ　ことさらに。
○中宮この院にまかできせ給ふ　明石中宮病を訪はせ給んが爲行啓あるなり。
○この世の有樣を見はてず　御子達などいまだ幼くおはすれば云ふ。
○名對面　供奉の人々の名を申すなり。
○素離れたる心地して　離れて別の處に居る心地して。
○方々におはしましては　紫上は霞殿に中宮は東の對にと離れ〳〵におはしては。

れど、先づ我濁行方知らずなりなんを、思し續くる、いみじう哀なり。

事果てゝ、己がじゝ歸り給ひなんとするも、遠き別めきて惜まる。花散里の御方に、

（紫）「絶えぬべき、御法ながらぞ、頼まるゝ、世々にと結ぶ、中の契を。」

御返り、

（花散）「結び置く、契は絶えじ、大方の、殘少き、御法なりとも。」

やがてこの序に、不斷の讀經懺法などたゆみ無く、尊き事どもをせさせ給ふ。御修法は異なる驗も見えで程經ぬれば、例の事になりて、うちはへ然るべき所々、寺々にてぞせさせ給ひける。

夏になりては、例の暑さにさへいとゞ消え入り給ふべき折々多かり。その事とおどろ〳〵しからぬ御心地なれど、唯いと弱き樣になり給へれば、むつかしげに所せく惱み給ふ事も無し。侍ふ人々も、如何におはしまさんとするにかと思ひ寄るにも、先づ搔きくらし、あたらしう悲しき御有樣と見奉る。斯くのみおはすれば、中宮此院にまかゞでさせ給ふ。東の對におはしますべければ、こなたに將待ち聞え給ふ。儀式など例に變らねど、この世の有樣を見果てずなりぬるなどおぼせば、萬に付けて物哀なり。名對面を聞き給ふにも、その人かの人など、耳を留めて聞かれ給ふ。上達部など、いと多く仕う奉り給へり。久しき御對面のとだえを、珍しく思して、御物語こまやかに聞え給ふ。院入り給ひて、（源）「今夜は素離れたる心地して、無德なりや、罷り休み侍らん。」とて、渡り給ひぬ。起き居給へるを嬉しと思したるも、いとはかなき程の御慰めなり。（中宮）「方々におはしましては、あなたに渡らせ給はんも忝し。參らんこと將わり無くなりにて侍れば。」とて、しばしは此方におはすれば、明石の御方も渡り給ひて、心深げに靜まりたる御物語ども聞えかはし給ふ。上は御心の中に、思し運らす事多かれど、賢しげに、亡からん後などの給ひ出づる事も無し。唯なべての世の常無き有樣を、大どかに言少なるものから、淺はかにはあらず、の給ひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらんよりも哀に、物心細き御氣色は著う見えける。宮達を見奉り給うても、（紫）「各の御行末をゆかしく思ひ聞えけるこそ、斯くはかなかりける身を惜む心のまじりけるにや。」とて、涙ぐみ給へる御顏の匂、いみじうをかしげなり。何ど斯うのみ思したらんとおぼすに、中宮うち泣き給ひぬ。ゆゝしげになどは聞えなし給はず。物の序などにぞ、年頃仕うまつり馴れたる人々の、特なる寄邊無ういとほしげなるは、この人かの人、侍らずなりなん後に、御心留めて尋ね思ほせ、などばかり聞え給ひける。御讀經などによりてぞ、例の御方に渡り給ふ。三宮は數多の御中に、いとをかしげにてありき給ふを、御心地のひまには、前に居ゑ奉り給ひて、人の聞かぬ間に、（紫）「麝が侍らざらんに、思し出でなんや。」と聞え給へば、（匂）「いと戀しかりなん。麝は内の上よりも宮よりも、母をこそ優りて思ひ聞ゆれ。おはせずば心地むつかしかりなん。」とて、目を摩り紛はし給へる樣、をかしければ、ほゝゑみながら涙は落ちぬ。（紫）「おとなになり給ひなば、此處に住み給ひて、この對の前なる紅梅と櫻とは、花の折々に心留めてもてあそび給へ。さるべからん折は、佛にも奉り給へ。」と聞え給へば、うちうなづきて、御顏をまもりて涙の墮つべかゝめれば、立ちておはしぬ。取り別きて生ふし立て奉り給へれば、此

○上　紫上。
○さかしげになからん後など云々　賢しぶりて遺言などすることもなしとなり。
○言に出でたらんよりも言に出して種々仰せ置かるるよりも。
○宮達　中宮の御腹の宮達。
○御讀經　中宮の季の御讀經。
○例の御方　東の對。
○三宮　匂宮。
○内の上　今上。
○宮　中宮。
○母　匂宮を紫上育て給ひしかば紫上を母との給ふなり。
○此宮と姫宮と　匂宮と女一宮と。

○託言がましし　かこつけがましし。
○身に沁むばかり　詞花集に「秋吹くは如何なる色の風なれば身に沁むばかり人の戀しき」
○露けき折勝にて　涙催し勝。
○限もなくらうたげに　瘦せての後はなり。
○この御前　中宮の御前。
○置くと見る　紫上自身を露に寄せ起くを置くに掛けて詠めり。
○折さへ忍び難きを　此折風の吹き出でたるなり。
○やゝもせば云々　同じくは共に消え果てたしとの意。

宮と姫君とをぞ、見さし聞え給はん事、口惜しく哀におぼされける。

秋待ち付けて、世の中少し涼しくなりては、御心地も聊さわやぐやうなれど、猶ともすれば託言がまし。然るは身に沁むばかりおぼさるべき秋風ならねど、露けき折勝にて過し給ふ。中宮は參り給ひなんとするを、今しばしは御覽ぜよとも聞えまほしうおぼせども、賢しきやうにもあり、內裏の御使の隙なきも煩はしければ、さも聞え給はぬに、あなたにも渡り給はねば、宮ぞ渡り給ひける。傍痛けれど、實に見奉らぬも甲斐なしとて、こなたに御しつらひを特にせさせ給ふ。こよなう痩せ細り給へれど、斯くてこそあてになまめかしき事の、限無さも增さりて、めでたかりけれと、來し方に餘り匂多く、鮮々とおはせし盛は、なか〳〵此世の花の薫にもよそへられ給ひしを、限も無くらうたげにをかしげなる御樣にて、いと假初に世を思ひ給へる氣色、似るもの無く心苦しく、すゞろに物悲し。風すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見給ふとて脇息により居給へるを、院渡りて見奉り給ひて、(源)「今日はいと能く起き居給ふめるは、この御前にては、こよなく御心も晴々しげなゝめりかし。」と聞え給ふ。かばかりの間あるをも、いと嬉しと思ひ聞え給へる御氣色を見給ふも心苦しく、終に如何に思し騷がんと思ふに、あはれなれば、

(紫)「置くと見る、程ぞはかなき、ともすれば、風に亂るゝ、萩の上露。」

實にぞ折れ返り、とまるべうもあらぬ花の露も、よそへられたる折さへ忍び難きを、

(源)「やゝもせば、消を爭ふ、露の世に、後れ先だつ、程經ずもがな。」

とて、御涙を拂ひ敢へ給はず、宮、

○秋風に云々　人生の無常なる意。
○御かたちども　源氏紫上中宮だちのなり。
○今は渡らせ給ひね　今は還御し給へ。
○前々もかくて云々　靈氣の事ありし時かくて再生し給ひしこと前にあり。
○限無くおぼす　嬉しくも亦悲しくも思して感慨無量なり。
○更なりや　今更に驚き給ふかな。
○年頃の本意　出家の素志。
○此世には空しき　現世の祈禱の效驗は空しとなり。

(中宮)「秋風に、暫しとまらぬ、露の世を、誰か草葉の、上とのみ見ん。」

と聞えかはし給ふ。御貌どもあらまほしく、見る甲斐あるに付けても、かくて千年をすぐすわざもがなとおぼさるれど、心に協はぬ事なれば、繫けとめん方無きぞ悲しかりける。

(紫)「今は渡らせ給ひね。みだり心地いと苦しくなり侍りぬ。言ふ甲斐なくなりにける程と云ひながら、いと無禮げに侍りや。」とて、御几帳引き寄せて臥し給へる樣の、常よりもいと賴もしげ無く見え給へば、如何におぼさるゝにかとて、宮は御手を捉へ奉りて、泣く泣く見奉り給ふに、誠に消え行く露の心地して、限に見え給へば、御誦經の使ども、數も知らず立ち騷ぎたり。前々も斯くて息出で給ふ折に習ひ給ひて、御靈氣と疑ひ給ひて、夜一夜樣々の事を盡させ給へど、甲斐もなく、明け果つる程に消え果て給ひぬ。宮も歸り給はで、斯くて見奉り給へるを、限無くおぼす。誰も〳〵ことわりの別にて類ある事と思されず、珍らかにいみじく、明けぐれの夢に惑ひ給ふ程、更なりや。さかしき人おはせざりけり。侍ふ女房などもある限、更に物覺えたる無し。院は況ておぼし靜めん方無ければ、大將の君近く參り給へるを、御几帳の下に呼び寄せ奉り給ひて、(源)「かく今は限の樣なゝめるを、年頃の本意ありて思へる事、斯かる際に、其思違へて止みなんがいといとほしきを、御加持に侍ふ大德達、讀經の僧なども、皆聲やめて出でぬなゝめるを、さりとも立ち留りて物すべきもあらん。此世には空しき心地するを、佛の御驗、今は彼の冥き途の訪だに賴み申すべきを、頭おろすべき由物し給へ。さるべき僧誰かとまりたる。」などの給ふ御氣色、心強く思し做すべかゝめれど、御顏の色もあらぬ樣にいみじく堪へかね、御涙の止ら

568
357

○御靈氣などの云々　靈氣などが出家の事を思し寄らする事もやあらんとなり。
○戒の驗　受戒の功德。
○言ふ甲斐なくなり果てさせ給ひて後　逝去の後。
○何やかやと　思ひ渡りつるに續く。
○おほけなき心　分を越えたるあるまじき心。
○ありしばかり　野分の朝の事なり。
○見る〳〵　源氏が。
○こちたく　甚しく多くて。

ぬを、道理に悲しく見奉り給ふ。(タ)「御靈氣などの、これも人の御心亂らんとて、斯くのみ物は侍るを然もやおはしますらん。さらばとてもかくても御本意の事は、宜しき事に侍るなり。一日一夜にても、戒の驗こそは、空しからず侍るなれど、誠に言ふ甲斐なく果てさせ給ひて後の御髪ばかりをやつさせ給ひても、特なる彼の世の御光ともならせ給はざらん物から、目の前の悲のみ增さるやうにて、如何が侍るべからん。」と申し給ひて、御忌に籠り侍ふべき志ありて、まかでぬ僧その人かの人など召して、然るべき事ども、此君ぞ行ひ給ふ。年頃何やかやと、おほけなき心は無かりしかど、如何ならん世にありしばかりも見奉らん、仄にも御聲をだに聞かぬ事など、心にも離れず思ひ渡りつる物を、聲は遂に聞かせ給はずなりぬるにこそはあゝめれ。空しき御骸にても、今一度見奉らんの志叶ふべき折は、只今より外に、いかでかあらんと思ふに、包みも敢へず泣かれて、女房のある限騒ぎ惑ふを、「あなかま、しばし。」と鎭め顏にて、御几帳の帷子を、物の給ふ紛れに引き上げて見給へば、ほの〴〵と明け行く光も覺束なければ、大殿油近くかゝげて見奉り給ふに、飽かず美しげに、めでたう淸らに見ゆる御顏の惜しさに、此君の漸く覗き給ふを見る〳〵あながちに隱さんの御心も思されぬなゝめり。(源)「かく何事もまだ變らぬ氣色ながら、限の樣は著かりけるこそ。」とて、御袖を顏におし當て給へる程、大將の君も淚にくれて目も見え給はぬを、强ひて絞りあけて見奉るに、なか〳〵飽かず悲しき事類無きに、誠に心惑もしぬべし。御髪の唯打ち遣られ給へる程、こちたく淸らにて、露ばかり亂れたる氣色も無う、艶々と美しげなる樣ぞ限無き。燈のいと明きに、御色はいと白く光るやうに

○打ち紛らはす　容儀を取繕ふ。
○死に入る魂の云々　夕霧は悲しさに死に入りてやがて其魂が柴上の死骸に止らんと思はるとなり。
○限の御事　葬の御事。
○其日　十五日。
○はる〳〵と廣き野　火葬の地をいふ、鳥部野なるべし。
○嚴かしき　尊き。
○大將の君の御母君　薨の上。

て、とかく打ち紛らはす事ありし現の御持做よりも、言ふ甲斐なき樣に何心無くて臥し給へる御有樣の飽かぬ所無しと言はんも更なりや。なのめにだにあらず、類無きを見奉るに、死に入る魂の、やがて此御骸に止らんと思ほゆるも、わりなき事なりや。仕う奉りたる女房などの、物思ほゆるも無ければ、院ぞ何事も思し別れず思さるゝ御心地を、あながちに靜め給ひて、限の御事どもし給ふ。古も悲しとおぼす事も、數多見給ひし御身なれど、いと斯うおり立ちては、まだ知り給はざりける事を、すべて來し方行く末類無き心地し給ふ。

やがて其日、とかく葬め奉る。限ありける事なれば、骸を見つゝもえ過し給ふまじかりけるぞ心憂き世の中なりける。遙々と廣き野の、所も無く立ち込みて、限無く嚴しき作法なれど、いとはかなき烟にて、程無くのぼり給ひぬるも、例の事なれど敢無くいみじ。空を歩む心地して、人に凭りてぞおはしましける。見奉る人も、さばかり嚴かしき御身をと、物の心知らぬ下衆さへ泣かぬは無かりけり。御送の女房は、まして夢路に惑ふ心地して、車よりも轉び落ちぬべきをぞ、持て扱ひける。昔大將の君の御母君亡せ給へりし時の曉を思ひ出づるにも、かれは猶物の覺えけるにや、月の顏の明に覺えしを、今夜は唯闇れ惑ひ給へる。十四日に亡せ給ひて、これは十五日の曉なりけり。日はいと華やかに差し上りて、野邊の露も隱れたる隈無くて、世の中思し續くるに、いとゞ厭はしくいみじければ、後るとても幾世かは經べき。かゝる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げまほしくおもほせど、心弱き後の譏をおぼせば、此程を過さんとし給ふに、胸の塞き上ぐるぞ堪へ難か

568
357

○近く侍ひてするなり。　源氏に侍座

○昔の事　野分の朝に夕霧の紫上を見し事をいふ。

○定りたる念佛　四十九日の程の念佛なり。

○臥しても起きても云々　源氏の有樣なり。

○直道に云々　一向に佛道に歸せんとなり。

○やゝましき　やましき。

○惚け〳〵しきさまに見えじ　愁傷により耄けたりといはれじとなり。

○哀をも折過し給はぬ御心にて　哀をも見過し給はぬ御本性にて。

○大將の御母上　葵上。

○此頃の事　八月の事也。

○藏人の少將　柏木の弟。

○其秋の事　葵上の亡せ給ひし時の事。

○秋の夜　厭の世を掛けて詠めり。

○物のみ悲しき御心の儘ならば　源氏の切に悲しき御心の儘に大臣に聞え給はば。

○待ち取り給ひて　大臣が。

○目安き程にと　善き程にと用捨して。

○薄墨と云々　葵上逝去の時「限あれば薄墨衣淺けれど涙ぞ袖を淵となしける」と詠み給へり。此度も薄墨衣なれど少し濃なりとなり。

○世の中に云々　以下紫上の事を地にいへるなり。

りける。

大將の君も、御忌に籠り給ひて、あからさまにも罷出給はず、明暮近く侍ひて、心苦しくいみじき御氣色を、道理に悲しく見奉り給ひて、萬に慰め聞え給ふ。風野分だちて吹く夕暮に、昔の事おほし出でゝ、仄に見奉りしものをと、戀しく覺え給ふに、又限の程の夢の心地せしなど、人知れず思ひ續け給ふに、堪へ難く悲しければ、人目には然しも見えじと包みて、阿彌陀佛〳〵と引き給ふ數珠の數に紛らはしてぞ、涙の玉は持て消ち給ひける。

（夕）「古の、秋の夕の、戀しきに、今はと見えし、明けぐれの夢。」

ぞ名殘さへ憂かりける。やんごとなき僧ども侍はせ給ひて、定りたる念佛をば然るものにて、法華經など誦ぜさせ給ふ。かたぐ〳〵いとあはれなり。

臥しても起きても涙の干る世無く、霧ふたがりて明し暮し給ふ。古より御身の有樣おほし續くるに、鏡に見ゆる影を始めて人には異なりける身ながら、いはけなき程より悲しく常なき世を思ひ知るべく、佛などの勸め給ひける身を、心强く過して、遂に來し方行く先も例あらじと覺ゆる悲しさを見つるかな。今は此世に後めたき事殘らずなりぬ。直道に行に趣きなんに、障り所あるまじきを、いと斯く治めん方なき心惑にては、願はん道にも入り難くやと疚しきを、此思少しなのめに忘れさせ給へと、阿彌陀佛を念じ奉り給ふ。

所々の御弔、內裏を始め奉りて、例の作法ばかりにはあらず、いと繁く聞え給ふ。思し召したる心の程には、更に何事も目にも耳にも留まらず、心に懸り給ふ事あるまじけれど、人に惚け〳〵しき樣に見えじ。今更に我世の末に頑しく、心弱き惑にて、世の中をなん背きにけると、流れ留まらん名を思し愼むになん、身を心に任せぬ歎さへ打ち添へ給ひける。

致仕の大臣、哀をも折過し給はぬ御心にて、斯く世に類無く物し給ふ人の、はかなく亡せ給ひぬる事を、口惜しく哀におぼして、いと屢問ひ聞え給ふ。昔大將の御母上亡せ給へりしも、この頃の事ぞかしと思し出づるに、いと物悲しく、其折かの御身を惜み聞え給ひし人の、多くも亡せ給ひにけるかな、後れ先だつ程なき世なりけりや、など、しめやかなる夕暮に眺め給ふ。空の氣色もたゞならねば、御子の藏人の少將して奉り給ふ。哀なる事など細やかに聞え給ひて、端に、

（大臣）「古の、秋さへ今の、心地して、濡れにし袖に、露ぞ置き添ふ。」

折柄に、萬の舊事おほし出でられて、何と無く其秋の事戀しう搔き集め、こぼるゝ涙を拂ひも敢へ給はぬ紛れに、御返し、

（源）「露けさは、昔今とも、思ほえず、大方秋の、夜こそつらけれ。」

物のみ悲しき御心の儘ならば、待ち取り給ひては心弱くもと、目留め給ひつべき大臣の御心樣なれば、目安き程にと、度々の等閑ならぬ御弔の重なりぬる事と悅び聞え給ふ。

薄墨との給ひしよりは、今少し濃にて奉れり。世の中に幸あり、めでたき人も、愛無う大方の世に嫉まれ、善きに付けても心の限驕りて、人の爲苦しき人もあるを、怪しきまでずゝろなる人にも承けられ、はかなくし出で給ふ事も、何事に付けても、世に譽められ、心憎く折節に付けつゝ、勞々しく、有り難かりし人の御心ばへなりかし。然しもあるまじき大凡の人さへ、其頃は風の音蟲の聲に付けつゝ、涙落さぬは無し。況て仄にも見奉りし人

○冷泉院の后の宮　秋好中宮。

○枯れ果つる云々　紫上の亡せ給ひし秋を枯れ果つる野邊に喩へて詠めり。亡き人とは紫上なり。

○ことわり　紫上が春に心を寄せて秋に心を寄せ給はざりし理由。

○女方にぞおはします　源氏の恍れたるを人に見られんを厭ひて表樣に出で給はぬなり。

○人聞を　紫上故にと人の云はん事をなり。

○御わざの事ども　後のわざにて佛事なり。

○今日やとのみ　源氏出家の事を今日は〳〵と思ひ給ふなり。拾遺集に「佗びつつも昨日ばかりは過してき今日や我世の限なるらん」

の思ひ慰むべき世なし。年頃睦しく仕うまつり馴れたる人々、暫しも殘れる命、怨めしき事を歎きつゝ、尼になり、此世の外の山住などに、思ひ立つも有りけり。冷泉院の后の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、盡せぬ事ども聞え給ひて、

（秋好消息）「枯れ果つる、野邊を憂しとや、亡き人の、秋に心を、留めざりけん。今なんことわり知られ侍りぬる。」とありけるを、物覺えぬ御心にも、打ち返し置き難く見給ふ。言ふ甲斐あり、をかしからん方の慰めには、此宮ばかりこそおはしけれと、聊物紛るゝやうに思し續くるにも、涙のこぼるゝを、袖の暇無くえ搔き遣り給はず。

（源）「昇りにし、雲井ながらも、顧みよ、我飽き果てぬ、常ならぬ世に。」

押包み給ひてもとばかり打眺めておはす。

すくよかにもおほされず、我ながら殊の外に、惚れ〴〵しく、思し知らるゝ事多かる紛らはしに、女方にぞおはします。佛の御前に人繁からずもてなして、のどやかに行ひ給ふ。千年をも諸共にと思しゝかど、限ある別ぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露も別事に紛るまじく、後の世をと、直道に思し立つ事たゆみ無し。されど人聞を憚り給ふなん、味氣なかりける。御わざの事ども、はか〴〵しくの給ひ置きつる事無かりければ、大將の君なん、取り持ちて仕う奉り給ひける。今日やとのみ、我身も心づかひせられ給ふ折多かるを、はかなくて積りけるも、夢の心地のみす。中宮なども、おほし忘るゝ時の間なく、戀ひ聞え給ふ。

――源氏物語　中卷（終）――

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月廿五日發行

源氏物語　中卷（奥付）

編者　藤村作
　　笹川種郎
　　尾上八郎

發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十六番地　株式會社博文館

右代表者取締役社長　大橋勇吉

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　君島潔

（共同印刷株式會社印刷）

¥1.20

發行所　東京市日本橋區本石町二四〇番　振替口座東京　株式會社博文館

博文館叢書
不許複製

568
357

現代國文學界の巨星を

博文館

校註者

文學博士　藤村作先生
文學博士　笹川種郎先生
文學博士　尾上八郎先生

○刊行の言葉

我が國文學界に於ける最高權威、藤村、笹川、尾上の三博士を校註者とし、こゝに未曾有の校定完本を刊行せんとす。

其の内容の廣汎、嚴選は言ふを須ひず、校訂、註解共に校註者その全蘊蓄を傾けたるものにして、その周到、精密なるは從來の國文書にその

擁せる大文學叢書出づ

叢書

比を見ざる所なり。價格至廉なるが故に、高等諸學校、中等學校の教科書に適切、又學生の受驗用參考書として最も當を得たるものと信ず。本叢書がひとり學界に貢献するに止まらず、又一般讀書界をも益する所少なからざるを思ひ、各册分賣の下に刊行す。

敢て學生諸子並に一般讀書人の賛同を俟つ。

題簽　尾上八郎博士
四六判背クロース裝函入本
アート刷口繪挿入
製本堅牢用紙特漉使用
各册選擇自由續々刊行

568
357

12669
は

博文館叢書

——新刊——

萬葉集略解	第一冊	正價	一・三〇
萬葉集略解	第二冊	正價	一・三〇
萬葉集略解	第三冊	正價	一・三〇
萬葉集略解考	第四冊 全	正價	一・六〇
源氏物語	上卷	正價	一・二〇
源氏物語	中卷	正價	一・二〇
源氏物語	下卷	正價	一・二〇
今昔物語	上卷	正價	一・三〇
芭蕉句選年考	全	正價	一・八〇

568
357

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black